Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2001, Vol. 48, 55 − 63.

大学生の社会的情報処理と友人関係適応の関連

久木山　健　一[1)]

問題と目的

社会的適応を考える有効な理論として Crick & Dodge (1994) による社会的情報処理理論があげられる。社会的情報処理研究でとり扱われてきた社会的適応 (Social Adjustment) の定義は各々の研究ごとに異なることが指摘されている。それらをまとめて，Crick & Dodge (1994) では社会的適応を，①仲間とうまくやっていける度合い，②順応的 (adaptive) で有能な行動に従事する度合い，③望ましくなく，有能でない行動に従事しない度合い，と定義しており，その具体例として，子どもが仲間にどれくらい受け入れられているか・子どもが仲間に対してどれくらい攻撃的であるか・仲間との交互作用から子どもがどれぐらい引きこもっているかをあげている。そのため社会的適応および社会的不適応の指標として，仲間指名法によるソシオメトリック地位，教師評定，行動観察などが使用されてきた。しかしこれらのほとんどは幼児から中学生までを対象としたものであり，青年期以降を対象に使用することは困難であると考えられる。

第1に，身体的な攻撃などの社会的不適応行動が加齢につれて見られにくくなることがあげられる。これまでの Dodge の社会的情報処理理論は，攻撃行動を主な対象として研究の蓄積がなされてきたために，攻撃行動が余り見られなくなる青年期以降に関しては関心が払われてこなかった。そのためこれまで青年および成人を対象とした社会的情報処理研究は，非行や犯罪などを行った者を対象とするもの (Slaby & Guerra, 1988; Dodge, Price, Bachorowski, & Newman, 1990) や，児童虐待を対象とするもの (Milner, 1998) などの極端な対象を取り上げたうえで，攻撃行動の検討を行うことが多かった。しかし，社会的情報処理理論は引っ込み思案児などの社会的不適応への適用の有効性も指摘されている。また，シャイネスやアサーションの不足などを認識しているものおよび，言語的な攻撃を行ってしまうことを認識しているものは青年期以降においても多い。これらのことより，一般的なアサーション実行がどのような社会的情報処理により異なるのかを検討することには意義があると考えられる。

第2に，Crick & Dodge (1994) は，青年期以降において社会的情報処理研究が行われない理由として，青年期以降になるにつれて，社会的不適応を規定する社会的集団が拡大し，関係のある仲間集団を限定することが困難になるという理由をあげている。これらのことから，大学生を対象としたソシオメトリックテストおよびゲスフーテストなどの他者評定などによる社会的適応の指標は，青年期以降では使用が困難であることが考えられる。

また，青年期以降においてどのような友人関係が適応的であるのかという問題は，近年の価値観の多様化や友人関係スタイルの多様化から一義的に決めることが出来ない。谷口 (1980) では，現代の人間関係として，これまでの相手とのへだたりをなくした甘えのある日本独自の人間関係から，相手との適度な心理的距離を保って成り立つ新たな人間関係への移行を指摘している。また松井 (1996) は総務庁青少年対策本部 (1986) による調査結果を元に，現代の青年を，“…気疲れをしないようにつきあい，悲しい時に話を聞いてもらいたいが，深刻な相談事は避けるという，一定の距離をおいた友人関係を営んでいる” と記述している。また橋本 (2000) では，対人方略の相違より表層群，無関心群，積極群，内向群を取り上げ，対人ストレスおよび精神的健康との関連を検討し，無関心群がほかの3群に較べて対人ストレス及び精神的健康面での適応がよいことを見出している。これらの研究は，これまで適応的であるとされていた友人関係の形態と精神面での適応の結びつきが，その形態の客観的な性質に依存するのではなく，自分の理想とする友人関係の形態と現実の友人関係の形態の一致に依存することを示唆していることが考えられる。それをうけて久木山 (2001) では精神的健康と親和動機，友人との距

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

離の認知の関連の検討を行い，高い親和動機を持っているが友人との距離が遠いと認知している者，および親和動機が低いにもかかわらず友人との距離が近い者が，そうでない者に較べて自尊感情が低いことを見出している。これらより，本研究では大学生を対象に友人関係適応を考える際に，主観的な精神的健康および満足をとりあげる。

社会的情報処理と友人関係適応との関連を検討するにあたり，本研究では複数の場面での社会的情報処理を測定し，それらを個別に検討する場合の関連と，それらを加算し総合する場合の関連の様相の比較を行う。社会的情報処理理論は，これまでの社会的適応に関する研究が状況に依存しない一般的な検討であると批判し，状況を特化することにより各状況での行動の予測力が高まることを主張している（濱口・新井，1991）。確かに，アサーションが出来ないことが社会的適応に結びつきやすい場面と結びにくい場面という違いが存在することが考えられ，どのような場面においてアサーションが出来ないことが友人関係適応に関連があるのかを検討することは，対策すべき状況の特定に有効であることが考えられる。しかし，Dodge（1993）では，抑うつなどに社会的情報処理を適用する時に適切なアプローチとして，複数の社会的情報処理に共通して影響を与える知識構造（Knowledge Structures）の存在を提唱している。また，これまでの測定では社会的情報処理プロセス自体の測定とそれに影響する知識構造の測定との分離が明確にはなされていない事についての指摘も存在する。そこで本研究では社会的情報処理プロセス自体の測定として各場面毎での検討を捉え，社会的情報処理に影響する知識構造の測定として両場面を総合したものの検討を捉えて，その比較を行う。

次に，本研究で取り上げる主観的な友人関係適応の指標と社会的情報処理との関連についての仮説をあげる。自尊感情に関しては，青年期の代表的な社会的不適応であるシャイネスとの関連がこれまで多く検討されてきており，それらの結果はおおむね自尊感情とシャイネスとの間に負の相関を見出している（Cheek & Buss, 1981; Jones, Briggs, & Smith, 1986）。この原因の一つとして，シャイネスによりアサーションが不可能になるために，自尊感情が低いことが考えられる。それより，アサーションを可能とするような社会的情報処理を行うことが出来る者は，自尊感情が高いことが考えられる。

友人関係満足度に関しては，適切な社会的情報処理を行うことが，自分が望む友人関係を営むことにつながり，その結果友人関係への満足へとつながることが考えられるために取り上げる。崔・新井（1998）のネガティブな感情表出の制御と精神的健康の関連の研究において，ネガティブな感情表出の制御を多く行うことが友人関係の満足感において望ましくないことが見出されている。これらのことより，アサーションが出来ているものおよびアサーションを導くような社会的情報処理が出来ているものは友人関係満足度が高いことが想定される。

ムードに関しては，シャイネス研究や孤独感研究などにおいて，シャイネスや孤独感の高い者はネガティブなムード状態にあることが多いことを示している。これらのことから，適切な社会的情報処理が出来ないこととネガティブなムードに関連があることが考えられる。

以上のことより，本研究では社会的情報処理と自尊感情，友人関係満足度，日常的なムードとの関連の検討を行うことにより，どのような社会的情報処理と友人関係適応との間に関連があるかの検討を行う。

方　法

調査時期：1999年11月，12月

調査対象者：兵庫県内の国立大学学生154名（男子55名，女子99名，平均年齢20.28）および私立短期大学学生91名（男子２名，女子89名，平均年齢18.53）の計243名。

調査方法：国立大学分に関しては著者により授業時間中に集団で実施した。私立短期大学分に関しては授業時に教員により一斉に実施した。

質問紙

(1)社会的情報処理尺度：久木山（2000a）の中学生を対象に作成された社会的情報処理尺度を使用した。その際，大学生において適切な文章となるように必要な部分に関しては漢字に訂正した（APPENDIX）。社会的情報処理尺度はCrick & Dodge（1994）による社会的情報処理の各ステップのうち，解釈，目標設定，反応選択・行動実行の各ステップを測定する下位尺度から成り立っている。解釈ステップは，対人関係で起きた問題の所在を相手に帰属する敵意帰属，自分に帰属する自責帰属，相手でも自分でもなく偶然に帰属する偶然帰属からなる。目標設定ステップは，相手との関係を維持しようとする友好性目標および何らかの主張をしようとする主張性目標からなる。行動選択および行動実行のステップに関しては，選択および実行の対象となる行動として身体的攻撃，言語的攻撃，アサーション，回避的行動を取り上げ，反応選択ステップでは，選択される反応に影響を与えるものとして各行動への効力予期を測定した。行動実行のステップでは，各行動の実行の度合いについてたずねる形式である。これらの尺度を，アサーションが出来ない結果攻撃行動の選択が高まるとされる。仲間からの意図の不明瞭な挑発を受ける挑発場面（以下，挑発場面とす

る）と，回避的行動の選択が高まるとされる，自分から相手に要請を行うことが求められる主張場面（以下，主張場面とする）の2場面において測定した。

(2)自尊感情尺度：Rosenberg（1956）の自尊感情尺度を山本・松井・山成（1982）が邦訳した10項目を使用した。

(3)友人関係満足度尺度：内田（1990）の生活感情尺度から，対人関係生活感情を構成する8項目を使用した。

(4)気分尺度：坂野ら（1994）による気分調査票の40項目を使用した。

これらの項目に対し，「あなたは以下のことにどれくらいあてはまりますか」という教示文を与え「まったくあてはまらない」から「ひじょうにあてはまる」までの6件法によって回答を採集した。

結果と考察

1．尺度の検討

(1)社会的情報処理尺度：各ステップごとに因子分析を行った結果，いずれのステップにおいても中学生においての因子分析と同様の因子構造を示した。このことより，大学生においても本尺度を使用することが可能であることが見出された。そのため，中学生用と同じ項目を用いて下位尺度を作成し[2]，合計得点を項目数で除したものを各下位尺度得点とした。

(2)自尊感情尺度：10項目に対して因子分析（主因子解）を行ったところ，固有値の減衰の仕方より1因子解を採用した。内的整合性は$\alpha=.75$であった。そのため全項目の平均点を自尊感情得点とした。

(3)友人関係満足度尺度：8項目に対して因子分析（主因子解）を行った結果，固有値の減衰の仕方より1因子解を採用した。内的整合性は$\alpha=.74$であった。そのため全項目の平均点を友人関係満足得点とした。

(4)気分調査票尺度：想定された各下位尺度ごとにα係数を求めたところ，すべてが.70以上であった（順に，緊張と興奮.80，爽快感.84，疲労感.85，抑うつ感.91，不安感.78）。そのため各下位尺度毎の全項目の平均点を各下位尺度得点とした。

2．社会的情報処理と自尊感情の関連の検討

社会的情報処理各ステップと自尊感情との関連を検討するために相関係数を求めた（Table 1）。その結果，挑発場面においてはアサーション効力とアサーション実行との間に有意な正の相関が見られ，敵意帰属と自責帰属との間に有意な負の相関が見られた。主張場面においては，主張性目標との間に有意な正の相関が見られた。両場面を総合した場合では，主張性目標，アサーション効力，アサーション実行との間に正の相関が見られ，自責帰属との間に有意な負の相関が見られた。自尊感情と関連の見られている社会的情報処理の多くはアサーションの実行に関連のあるものであることがいえる。シャイネスと自尊感情との間には安定して負の関係が見出されていることより，アサーションの実行が出来る事と自尊感情の間に関連が見られたことが考えられる。

3条件での相関の様相を比較すると，挑発場面においてのみ敵意帰属と自尊感情との間に負の相関が見られること，主張場面では主張性目標との間に正の相関が見ら

Table 1　社会的情報処理各ステップと自尊感情・友人関係満足度の相関係数

	挑発場面		主張場面		両場面総合	
	自尊感情	友人関係満足度	自尊感情	友人関係満足度	自尊感情	友人関係満足度
敵意帰属	−.13*	−.07	.07	.08	−.05	.00
自責帰属	−.18**	−.12	−.06	−.05	−.13*	−.10
偶然帰属	.05	.02	.02	−.03	.04	.00
友好性目標	−.07	.08	−.10	.06	−.09	.08
主張性目標	.10	.02	.14*	.16*	.15*	.11
言語的攻撃効力	.05	−.05	.06	.02	.06	−.02
アサーション効力	.20**	.14*	.09	.11	.18**	.16*
回避的行動効力	−.08	−.11	−.10	−.15*	−.10	−.15*
言語的攻撃実行	.11	.04	.04	.04	.08	.04
アサーション実行	.23**	.11	.12	.10	.23**	.13*
回避的行動実行	−.06	−.07	−.11	−.14*	−.10	−.12

*…p<.05，**…p<.01

2）ただし，大学生においては身体的攻撃が見られることは少ないと考えられるため，本研究では分析から除外した。

れるのみでほぼ自尊感情との関連が見られないこと，両場面総合においては挑発場面のみ及び主張場面のみに較べて自尊感情と有意な相関が見られることが多いことが見られた。

3．社会的情報処理と友人関係満足度との関連の検討

社会的情報処理各ステップと友人関係満足度との関連を検討するために相関係数を求めた（Table 1）。その結果，挑発場面においてはアサーション効力と有意な正の相関が見られた。主張場面においては，主張性目標と有意な正の相関が見られ，回避的行動効力および回避的行動実行との間に有意な負の相関が見られた。両場面総合ではアサーション効力およびアサーション実行と有意な正の相関が見られ，回避的行動効力との間に有意な負の相関が見られた。主張場面において回避的行動の実行に関連するものと友人関係満足度との間に負の相関が見られている。このことより，友人関係の満足度に関しては，自尊感情とは異なり，主張場面において回避的行動をとらないことが重要になっていることが考えられる。

3条件での相関の様相を比較すると，主張場面においてのみ主張性目標と友人関係満足度の間に正の相関が見られ，回避的行動実行と友人関係満足度の間に負の相関が見られている。また両場面総合においてのみ，アサーション実行と友人関係満足度の間に正の相関が見られている。

4．社会的情報処理と気分との関連の検討

社会的情報処理各ステップと日常的な気分との関係を検討するために相関係数を求めた（Table 2～4）。

挑発場面：緊張と興奮と敵意帰属，自責帰属，回避的行動効力との間に正の相関が見られた。爽快感とアサーション効力・アサーション実行との間に正の相関が見られた。疲労感と自責帰属，回避的行動効力，回避的行動実行との間に正の相関が見られ，アサーション効力，アサーション実行との間に負の相関が見られた。抑うつ感と敵意帰属，自責帰属，回避的行動効力，回避的行動実行との間に正の相関が見られ，アサーション効力とは負の相関が見られた。不安感とは，敵意帰属，自責帰属，回避的行動効力，回避的行動実行が正の相関を示した。

主張場面：緊張と興奮と敵意帰属，自責帰属，言語的攻撃実行，回避的行動実行との間に正の相関が見られた。爽快感と主張性目標，アサーション実行との間に正の相関が見られた。疲労感と敵意帰属，自責帰属，偶然帰属，回避的行動効力，回避的行動実行との間に正の相関が見られ，主張性目標との間に負の相関が見られた。抑うつ感と敵意帰属，自責帰属，回避的行動効力，回避的行動実行との間に正の相関が見られた。不安感とは，敵意帰属，自責帰属，回避的行動効力，回避的行動実行が正の相関を示した。

両場面総合：緊張と興奮と敵意帰属，自責帰属，言語的攻撃実行，回避的行動実行との間に正の相関が見られた。爽快感と主張性目標，アサーション効力，アサーション実行との間に正の相関が見られた。疲労感と敵意帰属，自責帰属，偶然帰属，回避的行動効力，回避的行動実行との間に正の相関が見られ，アサーション効力，アサーション実行との間に負の相関が見られた。抑うつ感と敵意帰属，自責帰属，回避的行動効力，回避的行動実行との間に正の相関が見られ，アサーション効力，アサーション実行の間に負の相関が見られた。不安感と敵意帰属，自責帰属，回避的行動効力，回避的行動実行との間に正の相関が見られた。

Table 2　日常的ムードと社会的情報処理各ステップの相関係数（挑発場面）

	緊張と興奮	爽快感	疲労感	抑うつ感	不安感
敵意帰属	.23**	.07	.09	.18**	.20**
自責帰属	.27**	−.04	.21**	.29**	.26**
偶然帰属	−.09	−.05	.05	.05	.09
友好性目標	−.04	.06	−.05	−.03	.08
主張性目標	.04	.07	−.04	−.04	.01
言語的攻撃効力	.10	.07	.07	.03	.00
アサーション効力	.02	.15*	−.21**	−.19**	−.11
回避的行動効力	.12	−.02	.20**	.14*	.17**
言語的攻撃実行	.14*	.04	.12	.07	.02
アサーション実行	.11	.15*	−.17**	−.13	−.03
回避的行動実行	.26**	−.06	.26**	.22**	.23**

*…p＜.05，**…p＜.01

Table 3　日常的ムードと社会的情報処理各ステップの相関係数（主張場面）

	緊張と興奮	爽快感	疲労感	抑うつ感	不安感
敵意帰属	.20**	.02	.15*	.17**	.20**
自責帰属	.25**	−.07	.20*	.23**	.22**
偶然帰属	.11	.00	.14*	.07	.01
友好性目標	−.01	.09	−.08	−.01	.03
主張性目標	−.03	.18**	−.19**	−.05	.02
言語的攻撃効力	.09	.08	.02	.03	.01
アサーション効力	−.10	.09	−.12	−.09	−.03
回避的行動効力	.05	−.07	.27**	.17**	.15**
言語的攻撃実行	.16*	.06	.09	.06	.05
アサーション実行	−.04	.17**	−.11	−.08	.04
回避的行動実行	.14*	−.08	.28**	.19**	.16*

*…p<.05,　**…p<.01

Table 4　日常的ムードと社会的情報処理各ステップの相関係数（両場面総合）

	緊張と興奮	爽快感	疲労感	抑うつ感	不安感
敵意帰属	.25**	.06	.13*	.20**	.23**
自責帰属	.29**	−.06	.23**	.28**	.27**
偶然帰属	.02	−.05	.14*	.08	.05
友好性目標	−.03	.08	−.07	−.02	.06
主張性目標	.01	.15*	−.13*	−.05	.02
言語的攻撃効力	.11	.08	.04	.03	.01
アサーション効力	−.03	.15*	−.21**	−.18**	−.10
回避的行動効力	.09	−.05	.27**	.18**	.18**
言語的攻撃実行	.16*	.06	.11	.07	.04
アサーション実行	.06	.20**	−.18**	−.13*	.00
回避的行動実行	.23**	−.08	.32**	.24**	.22**

*…p<.05,　**…p<.01

全体的な関連の傾向を見ると，抑うつ感，不安感に関してはいずれの条件においてもほぼ同様な関連の仕方を示しており，敵意帰属や自責帰属の多さおよび回避的行動効力および実行との関連が強かった。疲労感に関しては，上記の抑うつ感，不安感とほぼ同様の関連の仕方をしめすが，加えてアサーションの実行の少なさとの関連が強いことが見出された。緊張と興奮に関しては，回避的行動実行および言語的攻撃実行との関連が見られている。爽快感に関しては，アサーション実行との関連が見られている。3条件で比較した場合，挑発場面，主張場面に較べて両場面総合において社会的情報処理と気分との間に相関が見られることが多かった。次に，挑発場面では，両場面総合および主張場面において関連が見られる，爽快感と主張性目標，疲労感と敵意帰属，偶然帰属，主張性目標との間の相関が見られなかった。主張場面においては，両場面総合および挑発場面において関連が見られるアサーション効力と爽快感，疲労感，抑うつ感との間に相関が見られず，またアサーション実行と疲労感，抑うつ感との間にも相関が見られなかった。主張場面においてアサーションと気分の間に関連があまり見られないことに関しては，本研究で使用した主張場面がアサーションを行わなくてもすむ場面であるととらえたことが考えられる。ただし，爽快感とアサーション実行の間には関連が示されていることより，主張場面においてアサーションが実行できないことでネガティブなムード状態になることはないが，アサーションをすることでポジティブなムードになることは出来るという関係が存在することも考えられる。

総合的考察

本研究では社会的情報処理と友人関係適応の関連を，友人関係適応の主観的指標として自尊感情，友人関係満

足度，ムードを取り上げ検討を行った。その結果，おおむねアサーションを導く適切な社会的情報処理は自尊感情，友人関係満足度，ポジティブなムードと正の相関があり，ネガティブなムードと負の相関があることが見出された。このことより，社会的情報処理と友人関係適応の間には関連があることが示されたということが出来ると考えられる。ただし，本研究で見出された社会的情報処理各ステップの下位尺度と自尊感情尺度得点との相関係数は，最大で.23にとどまっており，友人関係満足度とは最大で.16にとどまっている。これらのことより，社会的情報処理と自尊感情および友人関係満足度との間には直接的な関連は有していないことが考えられる。

これらの原因として考えられるのは，各状況による場面特殊的な社会的情報処理と，状況に依存しない一般的な自尊感情および友人関係満足との概念間の距離が大きいことが挙げられる。竹尾（2001）では，状況情報のない自己主張尺度と家庭での話合いおよび公的な話合いという状況を付与した自己主張の測定との関連の検討を行い，状況情報のない自己主張の測定は公的な話合い場面の状況での自己主張の測定とのみ関連を示すを事を見出している。本研究においても，挑発場面および主張場面ごとで，それぞれ場面の特徴に即した相関が見られることなどが確認された。例えば，挑発場面においては攻撃的になることを避け，アサーションを行うことが望まれる場面であるために，攻撃的になることと関連が深い敵意帰属との関連が特に見出されたことがあげられる。また主張場面においては，回避的になることを避けアサーションを行うことが求められる場面であるために，回避的な行動を避けるようなものとの負の関連が見出されたことがあげられる。

また，本研究では挑発場面および主張場面を総合した両場面総合においては，各場面単独のものより関連を示すことが多い事が見出されている。この傾向に関しては，測定する項目数の増加による測定の信頼性の向上と言った要因も考えられるが，各場面ごとの測定でプロセスの測定が可能となり，両場面を総合することにより知識構造を測定することが出来るという仮説は一応の支持をえたとも考えられ，そのために自尊感情や友人関係などとの関連が強くなったことも考えられる。これらの結果は，場面の融合により，特性的なものとの関連が強くなるという面と，状況ごとの具体的な関連の喪失というネガティブな面の両方が同時に起こることが示唆されていると考えられる。しかし，本研究で使用した場面は2場面に過ぎず，それが様々な状況において共通する知識構造のすべてを反映するとは考えられず，また各場面の測定においても測定手法が質問紙であるために，プロセス以外の知識構造との分離が出来ているともいいがたい点が指摘できる。今後そのようなものを解決しうる研究手法の開発が望まれる。

次に，本研究で使用した主張場面においてのアサーションが，一般の大学生においては言語的攻撃であると捉えられた可能性が存在する。ただし，友人関係適応との関連から見ると，回避的行動実行はネガティブなムードとの関連が見られていることも見出されている。このことより，日本の大学生においては，主張場面においてアサーションを行いたいとは思ってはいるが，アサーションを悪いこととして捉えているために行うことが出来ず，自尊感情などの低さはないもののネガティブなムード状態にあることが考えられる。また，本研究で設定したアサーションおよび回避的行動の中間的なものを，被験者が望むことなどが考えられる。どのような友人関係を望むかについては個人により大きな差があり，それを受けてある状況において望む行動にも大きな個人差があるためであることが考えられる。今後は，状況を設定し，どのような行動をとることを望むかについての測定を行い，その行動ができるかできないかを測定した上で，自尊感情および友人関係満足度との関連を検討することが必要となってくるであろう。

最後に，本研究での社会的情報処理と友人関係の適応の関連の検討は相関関係の検討にとどまり，因果の検討については行うことが出来なかった。本研究では，社会的情報処理の結果としてムードが形成されることを想定して考察を行ったが，Dodge（1991）による情動と社会的情報処理の関連に関するモデルに従うと，先行するムードによる社会的情報処理への影響という流れも考えられる。今後は時系列的な測定による因果関係の解明や，社会的情報処理とムードとの結びつきを媒介することが考えられる友人関係の形態自体への認知などを取り入れることによる検討が必要となってくると言えよう。

引用文献

Cheek, J.M., & Buss, A.H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 330-339.

崔　京姫・新井邦二郎　1998　ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係　教育心理学研究，**46**，432-441.

Crick, N.R., Dodge, K.A. 1994 A Review and reformation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment

Psychological Bulletein, **115**, 74-101.

Dodge, K.A. 1991 Emotion and social information processing. In J. Garber & K.A. Dodge (Eds.) *The Development of emotion regulation and dysregulation*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dodge, K.A. 1993 Social-Cognitive mechanisms in the development of conduct disorder and depression. *Annual Review of Psychology*, **44**, 559-584.

Dodge, K.A., Price, J.M., Bachorowski, J., & Newman, J.P. 1990 Hostile attributional biases in severly aggressive adolescents. Journal of *Abnormal Psychology*, **99**, 385-92.

濱口佳和・新井邦二郎　1991　児童の社会的コンピテンスへの接近法についての考察－場面特殊的－内潜的過程アプローチの提唱 筑波大学心理学研究，**13**，185-202.

橋本　剛　2000　大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連　教育心理学研究，**48**，94-102.

Jones, W.H., Briggs, S.R., & Smith, T.G. 1986 Shyness: Conceptualization and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 629-639.

久木山健一　2000a　社会的情報処理と情動の関連に関する研究　神戸大学総合人間科学研究科修士論文（未刊行）

久木山健一　2001　親和動機の阻害と社会的スキル・友人関係満足・精神的健康の関連の検討　日本教育心理学会第43回総会発表論文集，**664**.

松井　豊　1996　親離れから異性との親密な関係の成立まで 齊藤誠一（編）人間関係の発達心理学４　青年期の人間関係 培風館.

Milner, J. S. 1998 Social information processing and child physical abuse: Theory and research. In D.J. Hansen (Ed). *Motivation and child maltreatment* (*Nebraska Symposium on Motivation Vol.* **46** pp.39-84 Lincoln

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Prinston Univ. Press.

坂野雄二・福井知美・熊野宏昭・堀江はるみ・川原健資・山本晴義・野村忍・末松弘行　1994　新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討　心身医学，**34**，629-636.

Slaby, R.G. , Guerra, N.G. 1988 Cognitive mediators of aggression in adolescent offenders : 1. Assessment. *Developmental Psychology*, **24**, 580 - 588.

総務庁青少年対策本部（編）1986 現代青年の生活と価値観　大蔵省印刷局

竹尾和子　2001　状況情報のない質問紙調査が明らかにすること －状況情報を含まない質問形式と状況情報を含む質問形式間の比較－ 日本教育心理学会第43回総会発表論文集，**517**

谷口龍男　1980 「われとなんじ」の哲学 －マルティン・ブーバー論－　北樹出版.

内田 圭子　1990　青年の生活感情に関する一感情　教育心理学研究，**38**，117-125.

山本真理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30**，64-68.

（2001年９月20日　受稿）

付　記

本論文は神戸大学総合人間科学研究科に提出した1999年度修士論文の一部を再分析したものである。本研究の実施にあたりご指導いただいた神戸大学発達科学部教授小石寛文先生，本論文の作成にあたりご指導いただいた速水敏彦先生，調査にご協力いただいた学生の皆様に厚く感謝いたします。

APPENDIX

（社会的情報処理尺度項目（大学生版）

1．解釈ステップ

（敵意帰属）

タロウ君が，イライラしていたから

タロウ君の，性格が悪いから

タロウ君が，嫌な気分の時であったから

タロウ君が，こういう事をよくする子だから

（自責帰属）

自分が，悪いことをしたから

自分が，してはいけないことをしてしまったから

自分の，性格が悪いから

自分が，悪いことをしたから

自分が，こういうことをよくされる子だから

自分が，タロウ君と仲良くしようとしてこなかったから

（偶然帰属）

偶然，こうなったから

たまたま，運が悪かったから

2．目標設定ステップ

（友好性目標）

タロウ君と，仲良しでいたい

タロウ君と，絶交したくはない

タロウ君を，困らせたくない

タロウ君を，嫌な気持ちにしたくない

（主張性目標）

タロウ君に，思っていることを伝えたい

タロウ君に，なにか言いたい

3．反応選択・反応実行ステップ

（言語的攻撃効力・言語的攻撃実行）

文句を言う

悪口を言う

（アサーション効力・アサーション実行）

どうするかをタロウ君と相談する

「一緒に片づけるのを手伝って」と言う

（回避的行動効力・回避的行動実行）

どこかへ行ってしまう

何も言わずに，黙っている

資　　料

ABSTRACT

The relations between social information processing and friendship adjustment.

Kenichi KUKIYAMA

The present study was conducted to examine the relationship between social information processing (SIP) and friendship adjustment. A questionnaire was administered to 245 college students (Male 57, Female 188). Subjects were required to complete the SIP inventory and friendship adjustment scales (self-esteem, satisfaction of friendship, daily moods). Results showed that self-esteem was related positive SIP, which leaded to assertion enactment. Satsfaction of friendship were also related positive SIP. Positive daily mood (Invigorating) were related to positive SIP and negative daily mood (tension and excitement, fatigue, depressed) are related to negative SIP, which leaded verbal aggression enactment and avoidant behavior enactment. Each relation between SIP and friendship adjustment were weak but differences of each situations were reflected. The results were discussed with reference to desirable friendship and situation specific and general competence perspectives.

Key words: social information processing, friendship adjustment, self-esteem, mood